授業科目名	生態資源とグローバル社会	単位数	2
担当教員名	西原智昭	担当形態	単独
実務内容 （実務家教員の場合）			

「学位授与の方針」との関係

星槎大学は、「人を認める、人を排除しない、仲間を作る」という三つの約束のもと、「人と人、そして人と自然とが共生する社会の創造に貢献する」を教育理念としています。共生科学部は、この三つの約束、教育理念に基づき、「21 世紀を創造する広く深い知の涵養」「共生する心の耕作」「課題探究能力の育成」「インクルージョン教育に基づいた社会実践を担い、社会変革を目指す人材の養成」を教育目的とし、以下の「星槎共生スピリット」を身に付けたものに学位を授与します。

A. 共生社会創造のために、教育、福祉、環境、国際関係、スポーツ身体表現の専門的知識を生かし、狭い専門領域を越えて統合しようとする意志を持つこと。

B. 問題が生起する現場において、専門知や統合知を使い、解決のために実践しようとする気概を持つこと。

C. 共感理解教育の理念を認識し、実践すること。

D. 多様な人々や生命に対して、他者を認め、他者を排除せず、仲間を作るという星槎の三つの約束の精神に則って、共生社会の創造に貢献する姿勢を身につけていること。

E. 個人や社会にとって必要な課題の解決のため、自律的な課題探究能力を身につけていること。

F. 共生社会創造の目的のために、絶えず学び続ける意欲を持つこと。

授業の到達目標及びテーマ

（１）アフリカ・コンゴ盆地の熱帯林地域の事例をもとに、生態資源の開発・利用とそれに伴う影響および森林保全・海洋保全の重要性について理解すること。

（２）アフリカ・コンゴ盆地の熱帯林地域に依拠してきた先住民族の事例をもとに、先住民族の今日的意義を考察すること。

（３）生態資源の保全と利用に関わる課題について、グローバル社会の中で特に資源のない日本がどのような具体的な解決策を模索していくべきか再検討するその契機を得ること。

授業の概要

アフリカ・コンゴ盆地の熱帯林地域を主な対象に、森林生態系やそれに隣接する海洋生態系およびその地に生きる野生生物と先住民族について理解し、そこの地域でどのような生態資源がいかなる理由で消失の一途にあり、グローバル社会とどう関連しているのか、特にその課題の中で特に日本と強いつながりのあるものについて、グローバル・ローカル両視点から生態資源の保全と利用に関わる課題に対して具体的な方途を考察する。

授業計画

第１回：人類学となにか

第２回：アフリカ・コンゴ盆地の熱帯林地域に生息する野生の類人猿

第３回：アフリカ・コンゴ盆地に熱帯林の生態系（昆虫も含む）

第４回：生態資源の開発と現状（１）マルミミゾウ

第５回：生態資源の開発と現状（２）ヨウム

第６回：生態資源の開発と現状（３）熱帯の樹木
第７回：生態資源の開発と現状（４）鉱物資源、大規模農園によるパーム油等
第８回：アフリカ・コンゴ盆地の熱帯林地域における先住民族
第９回：森林消失とエボラウイルス・気候変動
第１０回：アフリカ・大西洋岸における海洋生態系
第１１回：生態資源の開発と現状（５）海底油田、海洋ゴミ（プラスチック）、リゾート開発（ツーリズム）など
第１２回：生態資源の開発と現状（６）違法漁船、クジラなど
第１３回：生態資源の開発・利用と日本との関わり
第１４回：日本が抱える課題：動物園・水族館、NGO、研究者・教育、メディア、ツーリズムなど
第１５回：　グローバル・ローカル両視点から生態資源の保全と利用に関わる課題とそれに対する具体的な方途
定期試験

スクーリングでの学修内容
以下の五つのテーマ①～⑤から一つを選びまとめたレポートの評価とその他質問事項などへの回答を実施する。スクーリング時にはそのときに設定した課題に基づきグループ討論を実施しグループ間の意見交換をするなど、アクティブラーニングの手法も用いる：
① アフリカ・コンゴ盆地の熱帯林に生息する類人猿（ゴリラ・チンパンジー）の生態とエボラ・ウイルス（主に第１回、第２回、第９回の内容）
② アフリカ・コンゴ盆地の熱帯林に生息するマルミミゾウと密猟・象牙利用（主に第４回の内容）
③ アフリカ・コンゴ盆地の熱帯林に生息するヨウムと国際的なペット需要（主に第５回の内容）
④ 熱帯材目的、ヤシ油農園、鉱物資源開発などによるアフリカ・コンゴ盆地の熱帯林の開発と利用（主に第３回、第６回、第７回の内容）
⑤ アフリカ・コンゴ盆地の熱帯林地域に隣接する大西洋岸における海洋生態系や生態資源の利用（主に、第１０回、第１１回、第１２回の内容）

以下の全体的な内容に関わる四つのテーマ⑥～⑨についての説明と科目修得試験に向けた指針の提示を実施する：
⑥アフリカ・コンゴ盆地の熱帯林生態系（昆虫を含む）の保全とそこに隣接する海洋生態系の保全の重要性について（主に、第２回、第３回、第４回、第５回、第６回、第７回、第１０回、第１１回、第１２回の内容）
⑦アフリカ・コンゴ盆地の熱帯林に依拠してきた先住民族とその音環境について（主に第８回の内容）
⑧資源開発と気候変動・新興ウイルスについて（主に第９回の内容）
⑨グローバルな社会との文脈において日本と生態資源の開発・利用との関わりを知り、とりわけ資源のない日本の抱える課題について（主に、第１３回、第１４回、第１５回の内容）

教科書
１．西原智昭『コンゴ共和国～マルミミゾウとホタルの行き交う森から：増補改訂版』（現代書館）2020 年、ISBN 978-47684-5877-8C 0040

２．尾本恵市『ヒトと文明』（ちくま新書）2016 年、ISBN 978-4-480-06933-7 C0245
３．谷口政次『教養としての資源問題～今、日本人が直視すべき現実』（東洋経済新聞社）2011 年 、ISBN 978-4-492-76197-7 （電子書籍）

補助動画教材
・野生生物と人類を考える講座～グローカルで超分野視点から学ぶ　1 ～50
https://www.youtube.com/playlist?list=PLwrsvYhJb8rKKLwM-kh2_e8T9Ozs-VtDt

参考文献
・伊谷純一郎『ゴリラとピグミーの森』（岩波新書）1961 年
・梅棹忠夫編『人類学のすすめ』（筑摩書房）1974 年
・市川光雄『森の狩猟民～ムブティ・ピグミーの生活』（人文書院）1982 年
・秋道智彌『クジラは誰のものか』（ちくま新書）2009 年
・デビッド・クアメン（山本光伸・訳、西原智昭・解説）『エボラの正体』（日経 BP）2015 年
・太田至など編『自然は誰のものか～住民参加型保全の逆説を乗り越える』
（京都大学学術出版会）2016 年
・山極寿一/尾本恵市『日本の人類学』（ちくま新書）2017 年
・大橋力『音と文明～音の環境学ことはじめ』（岩波書店）2003 年
・FSC（森林管理協議会）ジャパン：https://jp.fsc.org/jp-jp
・MSC（海洋管理協議会「海のエコラベル」）：https://www.msc.org/jp
・JEITA（一般社団法人 電子情報技術産業協会「責任ある鉱物調達」）：
https://home.jeita.or.jp/mineral/2020seminar/pdf/2020seminar.pdf
・一般社団法人 日本サステイナブルラベル協会：https://jsl.life/
・一般社団法人 日本エシカル推進協議会：https://www.jeijc.org/

学生に対する評価
スクーリング評価（２５％）、レポート評価（２５％）、科目修得試験（５０％）を総合して評価する。